

原 著

## 福祉専門職養成教育における現場体験のもつ意義 —基礎実習履修学生の学びから—

荒木 剛\* 山本 佳代子\*\* 通山 久仁子\*\*

### <抄 録>

本研究の目的は、福祉現場を体験したことで得られた学生の学びを明らかにし、福祉専門職養成教育における現場体験の意義を検討することである。

データの収集は、2007年度の「基礎実習」履修学生28名を対象に、半構造化インタビューにより行った。収集されたデータは質的に分析し、学びの内容を明らかにしていった。その結果、学生の学びとして「施設の実際」、「利用者の実際」、「福祉専門職としての姿勢・視点の芽生え」、「コミュニケーション技術」、「職員にみる援助の実際」、「対人援助における喜びの獲得」、「戸惑い・葛藤体験」、「現場体験による自己省察と変化」、「福祉・福祉職への関心の高まり」、「現場体験と大学での学びがつながる」という10のカテゴリーと36のサブカテゴリーが生成された。

現場体験の意義としては、(1) 現場の実際的な理解、(2) 利用者と向き合う、(3) 自分自身と向き合う、(4) 福祉の魅力の実感が明らかになった。

キーワード：福祉専門職養成教育、基礎実習、現場体験、学び、質的分析

### I 研究の背景

福祉専門職養成教育においては、大学の講義による知識や技術の習得とともに、実際に現場での体験を通して学びを得ていくことが大変重要である。

福祉学科では、2007年度より導入教育の一環として、第一学年を対象に「基礎実習」を導入している。この「基礎実習」は、学生が希望する施設で定期的かつ継続的な実習を100時間以上行い、現場体験を通して学びを得るものである。さらに、こうした現場体験によって、2年次以降の学習や3年次の「社会福祉援助技術現場実習」に向けた動機づけを行うことを目的としている。実習内容は施設によって異なるが、例えば、特別養護老人ホームでは、利用者とのコミュニケーションを始め、食事介助、レクリエーション活動、環境整備等が行われていた。

2007年度の履修学生は34名で、全員が100時間以上の実習を終了することができた。実習終了後の学生との面接や提出されたレポートからは、現場体験を通して様々な学びがあったことが窺えた。もちろん、そ

れらはいくまで学生が学んだことの一部であり、実際にはそれ以上の多様な学びがあったことが推察された。

ところで、学生の現場体験については、様々な学びが得られる一方で、ともすると現場体験が単に感想・感情レベルの体験にとどまってしまうこと<sup>1)</sup>、また、多くの戸惑いや困難に直面することなどが指摘されている<sup>2)</sup>。つまり、教員の側による現場体験に対する教育的支援が大変重要になってくると言える。特に「基礎実習」に関しては、その位置づけや目的からも、学生が現場体験を十分に振り返り、学びを深めていけるような確かな教育的支援を行っていく必要がある<sup>3)</sup>。

### II 研究の目的

福祉専門職養成教育において学生の現場体験は、福祉専門職としての実践力の獲得や資質形成、利用者理解の促進といった観点からも大変重要である。

そこで本研究は、「基礎実習」を履修した学生が、

\* 西南女学院大学保健福祉学部福祉学科 講師

\*\* 西南女学院大学保健福祉学部福祉学科 助手

現場体験を通して実際に何を学び得たのか、その内容を明らかにし、学生の「学び」という視点から現場体験の意義を捉えていく。また、これによって学生自身の学びを基軸とした教育的支援への足がかりとする。

### Ⅲ 研究方法

#### 1. 研究対象

2007年度の「基礎実習」履修学生34名中、研究協力を同意を得られた28名を対象とした。28名の実習施設については表1に示す通りである。

表 1. 対象学生の実習領域および実習先種別

学生	領域	種 別
1	児 童	幼稚園
2	児 童	特別支援学校
	高 齢 者	介護老人保健施設
3	障害児	知的障害児通園施設
4	児 童	幼稚園
5	高 齢 者	老人デイサービスセンター
6	障害児	知的障害児通園施設
7	障害者	精神障害者地域生活支援センター
8	児 童	学童保育クラブ
9	児 童	保育所
10	高 齢 者	老人デイサービスセンター
11	高 齢 者	養護老人ホーム
12	児 童	少年支援室
	障害者	精神障害者通所授産施設
13	障害児	知的障害児通園施設
14	高 齢 者	養護老人ホーム
15	高 齢 者	特別養護老人ホーム
16	高 齢 者	グループホーム
17	高 齢 者	グループホーム
18	高 齢 者	老人デイサービスセンター
19	高 齢 者	ケアハウス
20	障害児	知的障害児通園施設
21	高 齢 者	特別養護老人ホーム
22	児 童	少年支援室
	児 童	学童保育クラブ
23	障害児	知的障害児通園施設
24	児 童	少年支援室
	高 齢 者	特別養護老人ホーム
25	児 童	少年支援室
	高 齢 者	特別養護老人ホーム
26	高 齢 者	介護老人保健施設
27	高 齢 者	介護老人保健施設
28	障害者	知的障害者通所授産施設

#### 2. データの収集方法

半構造化インタビューにより個別にインタビューを実施した。インタビューガイドは「基礎実習」終了後に学生が提出したレポートを参考に、個々の学生のレポート内容に準じたものを作成した。インタビューガイドの詳細はそれぞれ異なるが、概ね (1) 「基礎実習」での活動内容、(2) 利用者との関わりの中で学んだこと・気づいたこと、(3) 職員との関わりの中で学んだこと・気づいたこと、(4) 実習後の自分自身の変化、(5) 実習全体を通して感じたこととし、学生自身の語りとして引き出せるような内容とした。なお、学生一人当たりの面接時間は約60分程度であった。

#### 3. データ分析の視点と方法

面接の内容は学生の承諾を得た上で録音し、逐語記録に起こしてデータとして分析した。分析手順は、データ中にある「福祉専門職としての知識、技術、価値、態度等の習得や理解の深まり」及び「現場体験による学生自身の変化」に加え、それらにつながる「体験そのもの」を現場体験からの「学び」と捉え、抽出・コード化した。次に、コード化したもので類似の意味を有するもの同士をまとめ、サブカテゴリーとした。さらに、サブカテゴリー同士の関係性を踏まえながら、カテゴリーを生成した。

こうした分析手順においては、研究者間で十分に討議しながら、妥当性・信頼性を担保できるよう配慮した。

#### 4. 倫理的配慮

学生への研究協力の依頼に際し、研究の趣旨や手続き等について文書・口頭で説明を行い、(1) 研究協力への同意は自由であること、(2) 同意書提出後も途中辞退は自由であること、(3) 面接での回答内容の削除等は自由であること、(4) 研究協力の有無及び面接での回答内容は個人の成績評価に一切影響しないことを伝えた。また、逐語記録は個人が特定されないようコード番号で扱い、研究責任者のもとで厳重に保管した。

なお、本研究は西南女学院大学の倫理審査委員会の承認を得ている。

表2. 「学び」の内容

( ) はコード数

カテゴリー	サブカテゴリー	学生の語り／コード (例)
施設の実際	施設生活や雰囲気 (8)	暗いイメージがあったんですけど、実際行ってみたら、自分で活動してりしている人がいたりとか、すごく明るく職員さんたちが色々やってるから、そこがたいぶ違った。 皆も普通に毎日過ごして、ボーっち過ごしてるじゃないですけど、笑わくはないんですけど、何か時間が有り余ってるっていうか。そのまァテレビ見る、寝る、みたいなそんな生活なんで。
	具体的な業務内容 (13)	最初、相談員、相談だけの仕事を主にするのかと思ってたんですけど、それだけじゃなくて、色んなことするんですね。 実際に老健に行ってみると、トイレの排泄の介助とか、入浴介助とか、食事介助とか、食事に行つて、食事とか、お風呂に入っている間に、その人の部屋の掃除をしたり、シーツ交換したりとかで。
	施設プログラムの効果 (6)	機能訓練とか、生活の一部でちょっと困難なところがある所をデイサービスで補っているっていうのはすごいと感じたので。 いつもは、すごい大人しそうな人が、もともと結構運動好きだったみたいで、バレーしてる時はいきいきしてたっていうか。すごい楽しんでたように見えました。
	家族や地域との関わり (4)	園児の人帰った後も、保護者の方が来て進路どうするだとか、すごいそこまで話し合ってることも。 (地域住民が) 何人かずつ (施設内の販売所に) 入ってきて。結構頻繁に来る人もいるみたいで。私は行ったことなかったんですけど、あぁ結構みんな来てるんだなあって、初めて分かりました。
利用者の実際	利用者の特性 (16)	食事だったら、やっぱり障害があるからこだわりがあって、これは絶対食べないとか。 (子どもが叩いたり、泣いたりする) そういうのはしゃべれんけん、気持ちを伝えたいけれど、伝えられんちゅうのを感じて、やったんだっていうのを初めて知りました。
	イメージとの違い (16)	接してみても、考えてた高齢者と全然違って、すごくしっかりしてるなあとか。 (子どもは) 何かキョッキョッキョッキョッキョ遊ぶだけかと思ったけど、結構色々考えているんだなあと思いました。
	利用者を取り巻く環境 (13)	やっぱり地域の人たちとか、家族の人たちの理解がもっといって。もっと勉強じゃないですけど、(障害を) 知る機会があったらいいなって、そういうふうになりました。 もうちょっとその人たち (授産施設で働く障害者) の頑張った分、(給料を) くないのかなっていうのを。たぶん普通の人が働いているのと一緒ぐらい、その人たちにとっては働いてると思うんで。
福祉専門職としての姿勢・視点の芽生え	利用者本位の姿勢 (27)	やっぱり人 (利用者) の気持ちを、できるだけ考えることが重要だと。子どもも、高齢者の人たちも、自分の思っていることがあるから、できるだけそれに気づいていけるように。 今利用者さんは何を求めているかとかそういう配慮も常に頭に入れておかないと。
	自立支援の理解 (11)	やれることは自分でやらせてもらうっていうのが一番大きい。何でもかんでもやるんじゃないなって。 何から何までやってあげたら、やっぱりその子のためになるわけでもないの。
	利用者の個別性への気づき (10)	自閉症にもいろんなパターンっていうか、一から十までそれぞれの特徴があって。 障害あるなしに関わらず、成長はやっぱり違うものなんで、焦ったらいけないなと思って。
	信頼関係の必要性 (4)	信頼関係ってのがすごく大切、だなんてのは思いましたね。やっぱり相手を信じられてないと、体重任せられないし、トイレに連れて行つてとかも言いにくいとか絶対あると思うんですけど。 私が信頼関係のないままに怒ると、私のことただ嫌いと思って、その (児童の不適切な) 行為自体は直らないから。
	利用者の持つ力への気づき (4)	こうゆうところが人よりちょっと出来ないけど、ここは人よりも出来るとか、ここが良いところじゃないけど、そんなのを見つけていけばいくほどその子がやっぱり可愛いし。 (自閉症のある) 人が販売をしている時に、電卓も何にも使わなく、すぐ計算をパツて頭でして、パツと答えを出して。一応職員の方が確認を電卓で打つんですけど、絶対合ってるんですよ。

福祉専門職養成教育における現場体験のもつ意義

カテゴリー	サブカテゴリー	学生の語り/コード (例)
福祉専門職としての 姿勢・視点の芽生え	観察・状況把握の大切さ (11)	子ども達の変化、見とかなきゃいけないんだなあと。 顔色や身体的、性格的とか、食事のアレルギーとかも持っていらっしゃる方がいるんで、そういう考慮をしていくのが支援だと思います。
	仕事への責任感 (6)	(利用者の)命に関わるので。だからすごい自分がやっていると自覚を持たないと、やっていけないなあと思っ (子どもが) 可愛いだけじゃできないし、興味があるからって理由だけでもできないなあと思いました。
コミュニケーション技術	名前で呼ぶことの効果 (6)	名前言うとかやっぱり利用者の方も、話す時の距離とかも近くなってきますよ。 (子どもが) 名前呼んだらこっち見てくれるんで。そしたら話したりとかしやすいで。それで、名前呼んでしゃべったりとか、遊んだりとかしてました。
	声かけや話題作りの工夫と方法 (29)	(今までとは違う) 別のことをする時とかに、どうしてそうしなきゃいけないかっていうのちょっと説明加えたりとかして。分かりやすく伝えられるように。 例えば、何かのテレビの話で言えば、相撲の話をよくする方とかいらっしゃったんで。昔話っていうか、そういうのを、ちょっとは知っとかないとなあっていうのとかもありましたし。
	非言語的コミュニケーションの大切さ (12)	子どもと接する中でやっぱり言葉ではできないけれど、言葉以外にちゃんと伝える方法があるってのを学びました。 何かをするにしてもやっぱり、目を見るとかも大事だなあっていうのはありましたね。
職員にみる援助の実際	対人援助の技術 (16)	(職員の子どもを) 怒った後のケアというか、もすごく上手だなとも思ったし。 やっぱり指導員の方は、褒めたりとか、一緒に遊んだりする中で、テンションっていうか、を上げたりして、子どもに合わせてやってたかなあって思います。
	利用者の理解 (13)	(職員は) 性格とかも、この子はこういう性格みたいな感じのことが分かってるんですよ、すごく。 (利用者は) 100人とかいるんですけど、(職員は) 一人ひとりの、ちゃんと顔と名前もちゃんと覚えてて、歳も覚えているんですよ。
	利用者に向き合う姿勢 (18)	(職員は) やっぱり子どもの目線っていうか、すごい優しい。(自分にとっては) 普通に話してたら、もう普通のちょっと(歳が)上の人って思うじゃないですか。なのに(子どもには) もうさうとう温かい感じで、それがすごい。 利用者さんから、結構文句言ってくる人とかいるじゃないですかー。そういう人とかに、(職員は) もう「あっさうやねー」みたいな、もういっつも笑顔で対応するんですよ。
対人援助における喜びの獲得	利用者との関係ができる (39)	不登校気味の子とかでも、だんだん仲良くなったら心開いてくれるから、ちょっと楽しくなる。 やっぱり(子どもが) だんだんと笑ってくれるようになってきてくれるのが一番嬉しくて。
	利用者の役に立つ (17)	(利用者から) 「あなたが来ると明るくなるわあ」みたいなことを言われたんですよ。それでちょっとそういうのも嬉しかったので。 本人だけじゃどうしようもない時に、手伝いができるっていうのは、すごく嬉しいっていうか。
	利用者から感謝される (5)	やっぱり利用者の方が「ありがとう」ってさっさと言ってくれるとか、すごく笑顔が輝いているように見るとか、私がやったことに対してすごく喜んでくれたりとか、されるのはこっちも嬉しいっていうか。 (利用者から) 「ありがとう」とか、「わあ今日はほんとに良かったわあ」みたいなこと言われてたら、ああ良かったなあって思っ。
	利用者から支えられる (7)	(自分の事情で) 気持ちが減入ってたところあったんですけど、(利用者)に話してもらって、すごく気持ちが楽になったっていうので。 実習一人で行って、すごく心細くて、何をしたら良いかも分からなくて。スタッフさんも集まっている中とかも入れないし。でもその間に利用者さんとコミュニケーション取ってる間にしゃべって笑顔になったりして。会話とかでも利用者さんの顔見るだけですごくもう嬉しくて。
戸惑い・葛藤体験	利用者との関わりがうまく取れない (22)	認知症の方と接したりすることが難しかったです。初めてだったし。なんか、話が通じなかったりして、言ってることも分からなかったし。 自分からもっと話しかければ良かったんですけど難しく。なんか本当にどういう風に話しかければ良いか分からなくて。
	適切な援助や対応ができない (16)	(子ども喧嘩に対して) もうちょっと強く言ったりとか、もっと違うやり方があったら、私がお場で解決っていうか、できたかもしれないなあって思っ。

福祉専門職養成教育における現場体験のもつ意義

カテゴリー	サブカテゴリー	学生の語り／コード (例)
戸惑い・葛藤体験		(食事の) 介助をする方は、喋れない人が多くて、(食事を口)に入れるのは入れれるんですけど、どのタイミングで入れたらいいんだろうみたいなことが多くて。
	集団の中で個人を尊重できない (17)	(食事が) ゆっくりな子に、(できる限り自分で食べるよう心がけて) 手伝いながらも、やっぱり(他の子どもに)遅れないようにっていうか。時間は決まっているから、それに間に合うように「どこまで手伝おう」みたいな。ほんとに難しかったですね。 (トイレ誘導を日課として) 皆やっているから理解して(誘導を)してあげなきゃいけないっていうのもあるけど、でも(利用者本人が)行きたくないのに無理やり連れて行くのも嫌だと思って。
現場体験による自己省察と変化	実習に取り組む姿勢 (19)	日頃から慣れてない人と話すのってあまり得意じゃないけど、でもそんなんじゃないんだなって思いました。いつも、小さいこと、話題でも、ふれるようにとか、あんまり慣れてない人にでも話しかけたりとか、ちゃんとやってないといけないのかなあって思いました。 もう最初はそれ(利用者の質問)に答えるだけで、また沈黙になるような感じだったんですけど。でもそれじゃいけないと思って。その次の日ぐらいから、なるべく自分から話しかけて行こうと思ったんですけど。
	自己の認識や見方の変化 (4)	やはり障害を持ってても他の子と別にそんなに変わりはないなあと思ったんですよ。なんか大変な部分は多いけど、だから普通に接するように接していけばいいのかなあとと思ったら(障害があっても)急に遊べて ほんとに(精神障害者といっても)全然変わらないんだなって人がたくさんいたっていうのが。今、普通だとか普通じゃないと言ったら失礼な気がするんですけど、そう思いました。
	日常生活における変化 (7)	自然とお年寄りを大事にしだした。今まで電車とかに乗ってても、席譲るっていうのが恥ずかしくて出来なかったんですよ。バスとかに乗ってても。なんですけど、実習行った後は自然と席譲るようになったんですよ。
福祉・福祉職への関心の高まり	学習意欲 (13)	(実習後は) すごく学ぼうというのが強くなって。ただ覚えるんじゃないで、自分に取り込むみたいな。 教科書開いてみたら、ほんとに入口のことしか書いてないとか、(以前、先生が) 言っていたみたいに、もっと知りたいっていうのが出てきた気がしますね。
	他の福祉領域への興味・関心 (9)	(実習に) 行ってみるとやっぱり色々勉強になって。自分が思っていることだけではなくて、色々な所に目を向けてみようっていうふうになりました。 自閉症だけでなくもっと、色々な障害を抱えた子と関わって行きたいなって思ってます。
	就職・進路 (24)	もともと大学に入ったのも障害者とかに関わりたくて入ったんで、(実習後に) またちょっと明確に出来たかなあって思います。 まだ色々何にするかとか、将来の夢とかも決まってないけど、でも(実習で) 色々なそういう仕事とか見れて、児童とかそういうのにもすごい興味を持ってたんで、(児童に関わる仕事は) いいなとは思っています。
現場体験と大学での学びがつながる	現場体験の意義 (13)	(現場は) 自分がこんぐらい大変なのかなって勝手に思ってたけど(実際に) 行った方が全然違いますなんか。大変さがその場で実感できるじゃないけど、目で見た方がたぶん理解しやすいっていうか。 実習行く前は、児童と触れ合う機会がなかったので、行った後では、具体的に考えることが出来ようになったと思います。
	知識の必要性 (11)	(実習で) 障害児施設に行くんだったらもっと障害について勉強しないと、もっと関わることは難しいと思ったし。 施設の人とかでもちゃんと知識持ってやってるから、知識は絶対私には足りないなと思うし。
	大学における学びの深化 (16)	(授業では) 特性を認めてあげなきゃいけないとかよくでるけど、それたぶん(実習に) 行ってなかったら特性を認めてあげるっていうことが、どういふことなのか分からなかった。 障害者の人の特徴とかを授業でやった時に「あつ、こういう人がいたなあ」っていうのは、ちょっとわかりやすくなりました、授業は。

\*同一学生が複数のコードを含む場合あり

#### IV 結果の概要

表2が示すように、現場体験における学生の学びについては、10のカテゴリーと36のサブカテゴリーが生成された。以下では、その概要について述べる。

##### 1. 施設の実際

施設の実際は、これまで学生自身が認識していた施設の業務内容や生活をより具体的な理解へと深めた学びである。〈施設生活や雰囲気〉〈具体的な業務内容〉〈施設プログラムの効果〉〈家族や地域との関わり〉の4つのサブカテゴリーからなる。

〈施設生活や雰囲気〉では、学生自身が施設生活や雰囲気に対して抱いていた「暗い」「堅い」などのイメージが変化し、「明るい」「楽しい」などの肯定的な印象が示された。しかし一方で、「単調」「退屈」といった印象もみられた。〈具体的な業務内容〉では、業務内容の幅広さや利用者への配慮の具体的な理解、また、その多忙さや大変さの実感がみられた。〈施設プログラムの効果〉は、施設機能や提供されるサービスの効果に対する気づきである。特に、機能訓練やレクリエーションが利用者にも与える効果への気づきがみられた。〈家族や地域との関わり〉は、施設生活や提供される援助が家族や地域との関わりの中で展開されていることへの気づきである。具体的には、施設と保護者との協力関係、地域住民との交流への気づきがみられた。

##### 2. 利用者の実際

利用者の実際は、学生が利用者との関わりの中で、利用者理解を深めていく学びである。これは、〈利用者の特性〉〈イメージとの違い〉〈利用者を取り巻く環境〉の3つのサブカテゴリーからなる。

〈利用者の特性〉は、食事面でこだわりを見せる障害者や帰宅願望のある認知症高齢者、上手く気持ちを伝えられない子どもなど利用者の特徴的な言動に触れることで、その特性を理解していく学びである。これは利用者の課題・ニーズの理解へと繋がる側面もある。〈イメージとの違い〉は、学生自身が思い描いていた利用者像と実際の違いである。例えば、全てに介助が必要な特別養護老人ホームの高齢者、人見知りする子どもといったイメージが実際は異なることに気づき、利用者に対する認識を新たにしている。〈利用者を取り巻く環境〉では、地域社会や家族の障害に対する理解不足、低い労働対価といった障害者の置かれている現実社会への気づきがみられた。

##### 3. 福祉専門職としての姿勢・視点の芽生え

福祉専門職としての姿勢・視点の芽生えは、福祉専門職に必要とされる基本的な姿勢や視点に関する学びである。これは、〈利用者本位の姿勢〉〈自立支援の理解〉〈利用者の個性への気づき〉〈信頼関係の必要性〉〈利用者の持つ力への気づき〉〈観察・状況把握の大切さ〉〈仕事への責任感〉の7つのサブカテゴリーからなる。

〈利用者本位の姿勢〉は、利用者の気持ちを十分に理解する、利用者のペースを尊重するなど利用者の立場を考えた援助を行う必要性への気づきである。〈自立支援の理解〉は、利用者ができることは自分でしてもらう、本当に必要な部分だけを援助するといった姿勢が、利用者の自立支援につながるという気づきである。また、自立支援の実践として、高齢者への残存機能を活かした介助、子どもの自発性を促す言葉かけや見守りの重要性も学んでいる。〈利用者の個性への気づき〉は、個別的な視点に基づいた利用者理解についての学びである。自閉症児のこだわりや意思表示の方法、また、成長過程などが一人ひとり異なることへの気づきがみられた。〈信頼関係の必要性〉は、援助者と利用者間における信頼関係の必要性への気づきである。介護場面で利用者が援助者に身体を預けたり、援助者が子どもに注意をしたりという行為の前提には、十分な信頼関係が築かれていることを学んでいる。〈利用者の持つ力への気づき〉は、利用者が持っている力や強さといった側面への気づきである。障害者の高い計算能力、子どもの記憶力、高齢者の生活意欲などに触れることによって得た学びである。〈観察・状況把握の大切さ〉は、利用者への観察を十分に行うこと、また、その状況把握を的確に行うことの大切さへの気づきである。日々の観察から利用者の変化に気づいたり、わずかな身体の動きからその意思を汲み取ったりと、観察の重要性を学んでいる。さらに、観察を含めて、利用者の状況を把握する重要性も学んでいる。〈仕事への責任感〉は、福祉専門職としての責任の重さや役割の大きさへの気づきである。利用者の生活・生命に深く関わっていく福祉専門職の仕事に触れ、強い責任感や自覚が求められることを学んでいる。

##### 4. コミュニケーション技術

コミュニケーション技術は、利用者との関係作りやコミュニケーション場面からの学びである。〈名前前で呼ぶことの効果〉〈声かけや話題作りの工夫と方法〉〈非言語的コミュニケーションの大切さ〉の3つのサ

ブカテゴリーからなる。

＜名前と呼ぶことの効果＞は、利用者を名前で呼ぶことによって、お互いの距離感が近くなったり、関係が深まったりすることへの気づきである。＜声かけや話題作りの工夫と方法＞では、利用者の状況を十分に配慮した声かけや分かりやすい表現内容・方法を工夫する必要性への気づきのみられた。また、利用者が興味や関心を示す話題を提供することが、関係作りのきっかけとなることへの気づきのみられた。＜非言語的コミュニケーションの大切さ＞は、非言語的コミュニケーションを活用した利用者への関わりについての学びである。言葉以外の表情や仕草によっても利用者の気持ちが読み取られることへの気づき、職員の表情が利用者を与える影響への気づきのみられた。

## 5. 職員にみる援助の実際

職員にみる援助の実際は、援助を行う職員の姿から得られた学びである。＜対人援助の技術＞＜利用者の理解＞＜利用者に向き合う姿勢＞の3つのサブカテゴリーからなる。

＜対人援助の技術＞は、職員が援助の中で活用する技術に関わる学びである。例えば、子どもを怒った後の適切なケア、認知症高齢者の行動に対する素早い対応、個人に応じたコミュニケーション技術などの学びのみられた。＜利用者の理解＞は、職員の利用者理解のあり方に関する学びである。職員が利用者一人ひとりの身体・精神状況はもちろん、性格、趣味、嗜好、行動の特徴などをしっかりと把握していることへの気づきのみられた。＜利用者に向き合う姿勢＞は、職員の利用者に関わる姿勢や仕事に取り組む姿からの学びである。子どもと同じ目線で温かく接する態度、常に笑顔を忘れないという姿勢、気配りの行き届いた仕事ぶりなどの学びのみられた。

## 6. 対人援助における喜びの獲得

対人援助における喜びの獲得は、利用者との関わりや援助を行う中で得られた喜びの体験である。＜利用者との関係ができる＞＜利用者の役に立つ＞＜利用者から感謝される＞＜利用者から支えられる＞の4つのサブカテゴリーからなる。

＜利用者との関係ができる＞は、利用者との関係性ができるしていく喜びである。同時に、利用者から受け入れられていく喜びでもある。特に実習初期の思うように利用者との関わりができない段階で、利用者の方から声をかけられたり、名前を覚えてもらったりという体

験による喜びである。＜利用者の役に立つ＞は、利用者から必要とされ、自らも利用者の役に立ったと実感できた喜びである。利用者から必要な存在として認められたり、頼られたりすることで自己の有用感を感じた喜びでもある。＜利用者から感謝される＞は、利用者から感謝される体験から得られた喜びである。援助を行った後の利用者の笑顔や感謝の言葉から感じる喜びである。＜利用者から支えられる＞は、援助する立場として利用者に関わりながら、逆に利用者から支えてもらうという体験である。利用者の言葉や笑顔によって心理的な落ち着きを得たり、また、子どもたちの頑張る姿から自らが勇気づけられたりした体験である。

## 7. 戸惑い・葛藤体験

戸惑い・葛藤体験は、学生が現場体験の中で、何かしらの戸惑いや困難を感じたり、また、葛藤を体験したものである。＜利用者との関わりがうまく取れない＞＜適切な援助や対応ができない＞＜集団の中で個人を尊重できない＞の3つのサブカテゴリーからなる。

＜利用者との関わりがうまく取れない＞は、利用者との関わりを持つとするが、そのきっかけや方法が分からなかったり、利用者の訴える内容が理解できなかったりと関係形成がうまくいかずに戸惑いや困難を感じたものである。＜適切な援助や対応ができない＞は、援助者として利用者に適切な援助を提供できなかったり、また、状況に応じた対応が取れないことによる戸惑いや困難である。具体的には、子どもの喧嘩の仲裁や注意の仕方、高齢者の食事介助、帰宅願望のある認知症高齢者への対応においてこうした戸惑いや困難のみられた。＜集団の中で個人を尊重できない＞は、集団に対して援助を行うという施設の性格上、利用者個人の意思やペースを尊重した支援ができずに戸惑いや困難を感じるものである。これには葛藤を伴うものも多くみられた。

## 8. 現場体験による自己省察と変化

現場体験による自己省察と変化は、現場での体験によって自己の内面を見つめ直したり、日常生活での行動を変容させたものである。＜実習に取り組む姿勢＞＜自己の認識や見方の変化＞＜日常生活における変化＞の3つのサブカテゴリーからなる。

＜実習に取り組む姿勢＞は日々の実習において、自らの実習に臨む心構えや姿勢を改めて振り返ることで得られた学びである。利用者や職員に積極的に関わっ

ていく必要性への気づき、消極的な性格を変えていこうとする姿勢、自ら目標設定を行い実習に臨む意欲などがみられた。〈自己の認識や見方の変化〉は、現場体験によって利用者に対する認識や見方を変化させた学びである。これは単に利用者のイメージと実際が違ったという認識にとどまるものではなく、学生自身のこれまでの認識や見方を見つめ直すといった自己の振り返りまで含んでいる。〈日常生活における変化〉は、現場体験を経たことで、日常生活においても変化が生じてきたという学びである。これまでとは違い、日頃の生活で高齢者や障害者に積極的に声をかけられるようになったり、自然に子どもへの援助ができるようになったりした変化である。

## 9. 福祉・福祉職への関心の高まり

福祉・福祉職への関心の高まりは、現場体験による福祉への興味や関心の深まり、就職に向けた動機の高まりである。これは〈学習意欲〉〈他の福祉領域への興味・関心〉〈就職・進路〉の3つのサブカテゴリーからなる。

〈学習意欲〉は現場体験を踏まえ、さらに学習面でも学びを深めたいという意欲の高まりである。具体的には、関係資格の取得に向けて学習を始めたり、自己学習により知識を深めたりしている。〈他の福祉領域への興味・関心〉は、自分が体験した領域や施設以外への興味・関心の広がりである。現場体験を踏まえ、さらに別の施設でも経験を積みたい、他の領域にも視野を広げたいという意欲を高めている。〈就職・進路〉は、現場体験によって福祉職への意欲を高め、その目標を明確化したというものである。これまで持っていた福祉領域への就職という進路を再確認し、動機を強めたり、また、漠然としていた進路をより明確にしたりしている。

## 10. 現場体験と大学での学びがつながる

現場体験と大学での学びがつながるとは、現場体験から得られた学びと大学において学ぶ内容がつながりをみせることで、双方の学びがさらに深まっていくことである。これは、〈現場体験の意義〉〈知識の必要性〉〈大学における学びの深化〉の3つのサブカテゴリーからなる。

〈現場体験の意義〉は、現場体験の意義や重要性への気づきである。利用者との具体的な関わり、仕事の大変さの実感、自らの課題の認識など実際に現場を体験したことで、教科書や大学の講義では学べない現場

ならではの学びがあることに気づいている。〈知識の必要性〉とは、現場を体験したことで、より一層多くの知識が必要なことに気づいた学びである。福祉に関わる法律・制度、利用者の疾患・障害に関する知識の必要性を感じると同時に、自らの知識不足を自覚している。〈大学における学びの深化〉とは、現場での様々な体験を経たことで、大学における学びがさらに深まっていくというものである。講義や教科書で触れられる内容を自らの現場体験にリンクさせ、より理解を深めている。

## V 考 察

以上の結果からも、学生は現場体験の中から実に様々な学びを得ていることが分かる。ここでは、今回明らかになった学生の学びを踏まえて、現場体験の意義と今後の教育的支援に向けた課題について述べる。

### 1. 現場体験の意義

#### ①現場の実際的な理解

学生は一定期間現場に身を置くことで、その実際を体験的に学んでおり、これは現場体験の大きな意義の一つといえる。

ボランティア活動など個人的な経験の有無にもよるが、多くの学生にとって現場とは一体どのような場所なのか、そこにはどのような利用者がいて、どのような援助が行われているのかといった点は、漠然としたイメージでしかない。しかし、現場体験は学生のこうしたイメージをより現実的なものへと深化・変容させていく。

例えば、施設の実際については、具体的な業務を実践したり、職員の仕事の様子を見たりすることで、その幅広さや難しさなどを実体験として学ぶこととなる。ある学生は、施設で体験した業務内容の一つひとつを挙げ、イメージしていた仕事の枠を大きく超えていたことを語っている。同時に、こうした業務を限られた時間内で行っていくことから、身をもって現場の多忙さや大変さを実感していた。

利用者に関しても、現場で出会った一人ひとりの特徴や特性に触れることによって、それまで抱いていた利用者像を新たにし、利用者理解を深めている。さらに、こうした具体的な利用者理解は、利用者を取り巻く家族や社会といった環境面の理解へと広がっている。



また、現場に対する理解の深まりは、後に大学での学びとつながり、大学での学びを深める手助けとなっている。障害者の持つ特性やその特性を認めていく必要性など、大学での講義や教科書だけでは十分に理解することが難しい内容についても、学生は自らの現場体験と重ね合わせることで理解を深めることができている。その一方で、学生は大学でのいわゆる教科書的な学びとは異なる、現場ならではの学びの存在にも気づくこととなる。今回、多くの学生から現場体験の意義や重要性を実感する声が聞かれたのも、こうした気づきを得たからだと思われる。このように現場体験からその実際を学び、それが大学での学びへとつながることで、現場と大学、双方の学びを深めることができるといえる。

## ②利用者との向き合う

現場においてほとんどの学生は、利用者との関係形成に苦心し、特に実習初期の段階では、関係形成に向けて様々な試行錯誤を行っていると思われる。こうした試行錯誤の過程は、学生が利用者へと真剣に向き合っていく体験そのものであり、現場体験の大きな意義といえる。

利用者との関係形成という側面では、利用者の名前を呼ぶことの効果、声かけや話題の工夫などコミュニケーション技術についての学びがみられた。また、関係形成も含めた利用者との関わりからは、専門職としての姿勢や視点への芽生えがみられた。具体的には、利用者本位の姿勢や利用者の個性への気づき、信頼関係の必要性といった学びが示された。これらは、学生が利用者へと真剣に向き合い、関係性を深める中で学び得たものと思われる。また、利用者が持っている力や強さへの気づきもみられたが、こうした気づきによって、学生は利用者を「援助の対象」として捉えるのではなく、「一人の人間」として向き合っていく姿勢を獲得すると思われる。

さらに、学生は利用者との関係形成や関わりの中で、関係がうまく取れない、その場に応じた適切な援助や対応ができない、集団の中で利用者個人を尊重できないといった戸惑いや葛藤も数多く経験していた。もちろん、これらの多くは、学生自身の知識や経験不足などに起因するものである。しかし、尾崎（1999）が指摘するように、現場とはもともと戸惑いや葛藤が存在している場所であり、援助者が利用者へと深く関わろうとするほど、こうした戸惑いや葛藤が大きくなっていくものである<sup>4)</sup>。したがって、学生の経験した戸惑い

や葛藤は、単に知識や経験不足に起因するという側面だけでなく、学生が利用者との関わりを真剣に考え、実践した一つの成果であり、現場体験の大きな意義として捉えることができる。

## ③自分自身と向き合う

学生の学びからは、現場体験をきっかけとした自己の振り返りがみられた。例えば、ある学生は実習での態度を振り返っているが、その中で自分の性格や行動を見つめ直す作業も行っている。

また、ある学生は面接の中で「他の活発に遊べる子たちと接してみて、やはり障害を持ってても他の子と別にそんなに変わらないなあと思ったんですよ。～中略～だから普通の子に接するように接していけばいいのかなと思ったら急に遊べて」と語っている。この学生は、当初、障害のある子どもと上手く関わらず悩んでいた。しかし、子どもたちとの関わりを重ねることで、障害のない子と同様に、「普通に接する」ということに気づかされている。これは、子どもの持つ「障害」というものに捉われすぎたことへの気づきであり、この中で、学生は自らの「障害」に対する認識や見方を見つめ直していると思われる。

一方、自己の振り返りを行ったことで、学生の日常生活における行動や態度にも変化がみられている。バスで高齢者に席を譲ったり、困っている障害者に声をかけたりと、これまでの自分にはなかった新たな一面が生まれてきている。こうした変化の背景には、現場体験によって高齢者や障害者に対して関心が向くようになったり、また、高齢者や障害者との関わりを経験的に積んだという側面もある。しかし、これらに加えて、自分自身を見つめ直したことで、これまでの消極的だった自分から、積極性のある新たな自分に変化するきっかけを得たことが大きいといえる。

福祉専門職には自己覚知が求められるが、それは自分自身と向き合うことを前提としている。その意味で言えば、学生にとって現場体験とは自己覚知に向けた第一歩であり、福祉専門職としての成長を促す貴重な機会となっているといえる。

## ④福祉の魅力の実感

学生にとって日々の現場体験は、様々な学びとの出会いであると同時に、慣れない業務や対人関係など苦勞の連続である。特に、実習初期の段階においては、心身ともに大きな負担を感じていたと思われる。しかし、多くの学生は福祉の仕事に対して喜びや働きがい

を感じていた。

利用者との関係づくり苦心しながらも、何とか受け入れてもらえた時の喜び。利用者に必要とされ、役に立つことができた時の有用感。利用者からもらう心のこもった感謝の言葉。利用者から支えられた経験。学生の学びからは、現場で得た数多くの喜びの体験が示された。また、こうした喜びの体験によって、多くの学生が福祉や福祉職に対する関心を高め、その後の大学での学習や就職に向けた意欲を高めている。

現在、福祉職を取り巻く環境が厳しい中で、その労働条件や待遇の改善といった点に主な関心が払われている。もちろん、こうした点も大変重要な課題である。しかし同時に、福祉職が本来もっている対人援助の魅力、つまり、喜びや働きがいとしっかりと社会に伝えていくことも必要である。これから福祉を担っていく学生が、現場の中で喜びや働きがいを実体験として感じ取ったことには、改めて大きな意味があるといえる。

## 2. 教育的支援に向けた課題

### ①学びの視点の提供

面接では、様々な学びを語る学生がいる一方で、語られる内容が感想レベルに終始し、現場体験から何を学び得たのかが、具体的に示されない学生も見うけられた。こうした学生による学びの差は、学生自身の学びを感じ取る感覚的な部分の差にもよると思われるが、実習施設や利用者に対する理解の程度といったものが大きく影響していると考えられる。したがって、教員の側は、学生に対して事前に実習施設に関わる基本的な知識を習得させ、さらに個々の学習状況に応じて、学びの視点や枠組みを示していくことも必要になってくると思われる。

### ②戸惑いや葛藤体験に対する支援

前述の通り、戸惑いや葛藤とは、現場体験からの学びの一つとして、学生自身がしっかりと向き合っていかなければいけないものである。しかし、学生にとって戸惑いや葛藤と向き合うことは、大きな精神的負担を伴うものである。場合によっては、実習意欲の低下やバーンアウトを引き起こす可能性もある。したがって、教員は、学生が現場において戸惑いや葛藤を経験しながらもそれらと向き合い、学びへとつなげていけるよう、心理的側面も含めた教育的支援の方法・体制を整えていく必要がある。

### ③現場体験への意味づけ

学生にとって現場とは、対人援助の最前線として大変魅力的であり、多彩な学びを提供してくれる場所である。さらに、前述したように、そこでの学びは大学での学びを深める大きな手助けともなっている。しかし、面接の中で一部の学生からは、現場体験の印象や学びが大きかった分、大学での学習内容を軽視してしまう声も聞かれた。確かに、現場と大学では、それぞれ学びの性質が異なる。しかし、福祉専門職養成教育における学びとは、現場と大学、双方の学びがあってこそ成り立つものであり、互いが補完し合う関係にある。現場体験後の学習支援においては、学生がそのことを十分に認識でき、現場と大学、双方の学びを互いに深めていけるよう体験への意味づけを行っていくことが求められる。

## VI おわりに

本研究では、「基礎実習」履修者の現場体験における学びに焦点化し、その内容を明らかにした。また、明らかになった学びを通して、現場体験の意義について検討してきた。本研究によって、学生が現場体験からどのような学びを得ているのか、その様相を示すことができた。また、学生自身に現場体験を語ってもらうことで、レポートや日誌だけでは見えてこない学びも引き出すことができたと考える。さらに、改めて現場体験の重要性を認識すると共に、現場体験での学びを深める教育的支援に向けて、一定の示唆を得ることができたと思う。

しかし一方で、本研究は「基礎実習」履修者を対象としたため、示めされた学びについても次のような限界がある。第一に、「基礎実習」という選択科目の履修者の学びを捉えたにすぎないということ。第二に、「基礎実習」は施設ごとに活動内容が大きく異なっていたが、本研究ではこうした活動内容の違いと学びの獲得が十分に精査されていないこと。第三に、これはあくまで1年次段階での学びであり、養成教育課程が進んだ3年次の「社会福祉援助技術現場実習」では、また違った学びが示されると推察されること。

この他にも、現場体験においては、領域ごとに学びの特性や特徴があると思われるが、それらを示すことはできなかった。以上の点については、今後の研究課題としたい。

注

- 1) 永田 (2005) はこの点について、ともすると学生が現場で体験したものが全てのような錯覚に陥るとも指摘している。
- 2) 植本 (2003) は学生の戸惑いについて、KJ法を用いて詳しく整理・構造化している。
- 3) 学生の現場体験やそれを踏まえた教育的支援については、北川清一 (1992)、深谷美枝 (1997)、永田あゆみ、渡辺利子 (2005)、熊坂聡 (2008) などの先行研究がある。
- 4) 尾崎は、援助者が現場で直面する葛藤、不安、迷いなどを社会福祉援助の本質と捉え、援助における発見や創意工夫を作り出し、援助者を成長させるものとしている。

参考文献

- 北川清一：養護施設における実践機能と自己変革のための検討課題－現場実習の体験内容分析を通じて－。弘前学院紀要。第28号。pp15 - 24, 1992
- 深谷美枝：「実習体験」とは何か－発達障害施設における研究－。立正大学人間福祉。第1号。pp245 - 258, 199
- 永田あゆみ、渡辺利子：社会福祉現場実習における“体験”

- の意味と諸相。武蔵野大学現代社会学部紀要。第6号。pp131 - 144, 2005
- 熊坂聡：社会福祉援助技術現場実習における実習体験に関する一考察－実習関係文献の検討を通して－。社会福祉士。第15号。pp67 - 74, 2008
- 佐藤俊一：社会福祉実習学からの試み－「臨床への学」から「臨床からの学」へ－。淑徳大学社会学部研究紀要。第37号。pp1 - 18, 2003
- 植本圭一：社会福祉現場実習における実習学生のとまどい。道都大学紀要社会福祉学部。第29号。pp63 - 86, 2003
- 米本秀人：社会福祉専門教育の課題－教育現場と福祉現場の連携－。社会福祉研究。第69号。pp65 - 70, 1997年
- 尾崎新：「現場」のちから－社会福祉実践における現場とは何か－。誠信書房。東京。2002
- 尾崎新：「ゆらぐ」ことのできる力－ゆらぎと社会福祉実践－。誠信書房。東京。1999
- 宮田和明、加藤幸雄、牧野忠康、柿本誠、小椋喜一郎編：社会福祉専門職論。中央法規出版。東京。2007
- 岡本榮一、小池将文、竹内一夫、宮崎昭夫、山本圭介編：三訂 福祉実習ハンドブック。中央法規出版。東京。2006
- 木下康仁：グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践。弘文堂。東京。2003
- 佐藤郁哉：質的データ分析法。新曜社。東京。2008

## The Meaning of Experience in the Welfare Field for Education of the Social Work Profession —Through the Learning of Students who Have Completed Basic Practice of Social Work—

Takeshi Araki, Kayoko Yamamoto, Kuniko Tsuzan

### <Abstract>

The purpose of this study is to clarify the learning of students which they had experienced in the welfare field, and to examine the meaning of practice for education of social work profession. Data was collected by semi-structured interviews with 28 students who had completed basic practice of social work in 2007. The collected data was analyzed by a qualitative analysis and clarified the contents of learning. As a result, 10 categories were coded and refined : 「the actual circumstances of welfare field」, 「the actual circumstances of users」, 「awakening of attitudes and views as welfare profession」, 「communication techniques」, 「techniques of support by staff」, 「pleasure with supporting people」, 「confusion and conflict」, 「self-reflection and changes through experiences in the welfare field」, 「enhanced interests to welfare professions」, 「deepened understanding of the contents of lecture by the experience of practice」 and 36 sub-categories

The meaning of practice was clarified as : (1) practical understanding of the field,(2) deep understanding of users, (3) self-reflection, (4) feeling attracted towards the welfare field.

Key words: education of social work profession, basic practice of social work, experience in the welfare field, learning, qualitative analysis